



TITLE:

1939年7月の天象

AUTHOR(S):

CITATION:

1939年7月の天象. 天界 1939, 19(218): 166-163

ISSUE DATE:

1939-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167816>

RIGHT:

文 月 早くも七夕の祭りを迎へる七月にな

つた。思へば満二ヶ年前、一發の銃聲の描
き出した波紋は、世紀の新生を告げる契機
として深く記憶すべきである。吾人が平和
を欲する事は、何も世界いづれの國民にも

1939年

7月の天象

劣るものとは思はない。たゞ然し、歪められた、偽装の平和は、其れが如何
に扮飾され、理論づけられ様とも、依然歪められた害毒を更に内攻させ、人
類究極の不幸たる事をも斷言せざるを得ない。此處に聖戰をば、悠久なる銀
河の光の下に於て、いみじくも體認する。

北 天 梅雨の明けた空に、北極星を圍んで、西には大熊を垂れ下つて居る。
小北斗は先月に續いて天頂に向つて居る。其して龍の取り巻いて居る姿も、
前月と大差ない。ケフェウスは眞東に居る。カシオペアは北平線にあるが、
北海道位だと、相當高く浮んで居る。これは三年前の日食の思ひ出だ。

西 天 變化の少ない北天に比較して、動きが早い。獅子や山猫は、薄明が終
つた頃には、辛じて、地平線に在るが、其れも月始めの事である。乙女の優
しい姿も、暑さ當りにでもなつたのか、何んだか急に沈みが早い様だ。逆に
頑強其のものと云つた牧夫も、相當西に傾いて來た。海蛇の尻尾が一寸残つ
て居るのは御愛嬌ものである。

南に遡つて 天秤も西南に移つて、蝎が我物顔に丁度南中して居る。其の上の
蛇遣ひは見榮へがしない。でも何んと云つても、少し東目の射手座邊りの銀
河はすばらしい。不幸にして都會に住む人も、若し一日、田舎の夜に、涼を
取つたならば、此の邊りの、亂れに亂れた銀河の流れを見落してはならな
い。一雨夕立の去つた特に濕ッホイ夜、冷たく足を濡らす草の先は、今しあ
の銀河からの水を受けたのだらうか？南東天に昇る火星の景物は、今月の望
遠鏡への特別サ・ピスである。

中 天 冠も少し西に傾いて、先づヘルクレスが占めて居る。

東 天 でも其の一寸東、可なり高い空には、琴や白鳥、鷺等の姿も美しい。
七夕の逢瀬の楽しみ物語りは、人間として眺める限り、いつもほゞえまし
くなる。其のまゝに見ても、亦、人の構想を加へても、其れが洋の東西を問

はず、美しいのは、星の描く姿である。

太陽 “双子” 座の中央より “蟹” 座の中部へ移る例に依つて表にすれば

日付	赤経	赤緯	昼間	夜間	夕刻薄明終焉時刻
月 日	時 分 秒		時間 分	時間 分	時 分
7 1	6 36 2	+23°11'	14 29	9 31	21 4
6	6 56 41	22 48	14 26	9 34	21 3
11	7 17 11	22 16	14 22	9 38	21 1
16	7 37 32	21 33	14 17	9 43	20 57
21	7 57 39	20 42	14 10	9 50	20 53
26	8 17 33	19 41	14 4	9 56	20 48
31	8 37 12	18 33	13 56	10 4	20 42

夏至は過ぎたが、暑くなるのは7月半ば過ぎてからである。降り続く雨も已んで、高気圧が本邦の南東海上に腰を据へると、急に二三日で気温が上昇して、日々30°を越す様になる。と同時に熱源性の雷雨が頻々と襲來する。今まで地表にうんと水がしみ込んで居た爲か、梅雨明けには特に雷が多い。“雷が鳴れば梅雨が終つた”と云ふ、昔からの云ひ習しは先づ正しい。然し、北海道や、朝鮮、滿洲等は、内地の梅雨が明けてから曇雨になる場合が多い。特に朝鮮方面では、屢々出水の害を齎す。

月 “射手” 座に日齡13.9の月が始まり、一周終つて、更に山羊座に到つて8月に入る。例に従つて諸相を示すと、

日付	月齡	時刻	視直徑	星座	記事
7 2	14.9	2	29'57" (1日)	射 手	満 月
5	17.9	23	29 28	山羊, 水瓶の境	最 遠
10	22.9	5	29.55 (9日)	魚	下 弦
17	0.6	6	32.57 (16日)	双 子	新 月
18	1.6	8	33.16 (17日)	蟹	最 近
23	6.6	21	31.46	乙 女	上 弦
31	14.6	16	29.30	山 羊	満 月

(時刻は日本中央標準時、月齡、視直徑は同21時の値)

水星 夕方の星である。13日には東方最大離隔に達する。其の後ぐんぐん太陽を追っかけ、月末には可なり接近して内合に向ふ。中旬頃都合がよいと半月の姿が見得るだらう。

金星 曉の星である。日始めには1時間半太陽に先んじて居るが、月末には

時間に迫る。視直径は $10''4 \sim 9''9$ へと更に減少、光度も -3.4 等星、観望には最も悪條件に近い。

火星 待望の大接近は相互軌道の関係上、對衝より少し後れて7月30日に起る。其の時は地球に 58,000,000 キロまで接近する。先づ位置から云へば、月始めは山羊座の西端に居て、月末には射手座の東端へと、比較的ユツクリ逆行して居る。其の間にあつて23日には對衝の位置に来る。然しこんな事を云はずとも、月始めには21時頃、月末には19時、物凄い程赤い大きな星が、地平線上に姿を見せる事に依つて、誰しもの注目する所となるだらう。若し望遠鏡を向けたならば、5cm級の器械でも、其の模様と極冠も見得る程である。視直径は月始め $21''3$ 、30日最大となつて $24''25$ 、月末には $24''1$ である。光度 $-2.1 \sim -2.5$ 、同刻に見へる恒星中最輝星たるヴェガの10倍の光輝を放つて居る。敢て最接近の頃でなくも、本月から來月にかけては火星観測の**最好機會**である。望遠鏡の所有者は、口径の如何に拘はらず、是非見なくてはならない今月の火星だ。猶ほ火星面は目下秋分を1ヶ月程すぎ、南半球の極冠はグングン縮少して行き、其れにつれて、模様の濃さは一層深くなつて行くだらう。

木星 曉天の星“魚”座の春分點少し東を、ユツクリ順行中。光度は $-2.0 \sim -2.2$ へ、視直径は $35''2 \sim 43''0$ へと増加して、夜半には、もう地平線上に姿を現はす様になつて來る。猶ほ11日9.3等星を掩蔽するが日本からは見えない。

土星 同じく曉天の星“羊”座の西端に入つた。そろそろ曉天とは云へ其の美觀を見るのに都合よくなつて來た。光度は $+0.6 \sim +0.5$ へと、視直径も $15''5 \sim 16''3$ へと増加し、輪の傾きが $15^\circ 8' \sim 16^\circ 1'$ に達して來た。

天王星 曉天の星“羊”座の東端に居る。未だ觀望に不向きだ。

海王星 夕方の星ではあるが、太陽に近く、見る事はむづかしい。位置は獅子座である。

彗星 ウインケツク彗星は、月始め一寸見られるが上旬すぎると視界を去つてしまふ。豫想される彗星では是以外ないが何時珍客が來るかわからない。

ユリウス日 7月1日21時が 2429426.0 に當る。

火星數値一覽

太陽より受くる輻射量 (地球 = 1)	0.431
視半長徑 (天文單位距離にて)	0.4''68
〃 (地球より平均最近距離にて)	8.9''4
赤道半徑	3392 km
扁 率	0.0053
體 積 (地球 = 1)	0.1509
衛 星 數	2
質 量 (太陽 = 1)	0.323×10^{-4}
〃 (地球 = 1)	0.108
比 重 (地球 = 1)	0.714
〃 (水 = 1)	3.94
赤道重力 (地球 = 1)	0.38
反 射 能	0.15
平均極大光度	-1.8 等
赤道の傾斜	23.98
昇交點黃經	88°
對恒星週期	1.0260
最大光度	-2.5 等 (但七月30日の値)
赤 經	20 ^h 5 ^m 29 ^s .9 (〃)
赤 緯	26° 53' 46'' (〃)
距 離 (天文單位 = 1 4950 4201 km)	0.388 (〃)
視 直 徑 (地球より最近距離にて)	12.7'' (〃)

お こ と は り

北京に滞在中、天界 217 號を京都より送られ、一見しましたが、第 200 頁にある“東亞天文政策”と題する一文は間違つた點もあつて、遺憾に堪へません。小生不在中のこととは言へ、讀者に深く御わびします。此の全文は一應取り消し、改めて小生の責任あるものを載せます。(1939. 5. 10. 北京にて 山本生)